

連載「うみの物語」②

伊勢湾は古代、
海運と造船の
一大拠点だった。鳥羽・海の博物館館長
石原 義剛

神話時代から歴史時代へ移ろうとする頃、景行天皇の皇子・ヤマトタケルノミコト（小碓命）は、堂々たる軍船の、中央高く立てた天蓋の下に祭壇を設けて神々を祀り、草薙剣を並べ立て、八尋の鉾、威杖を飾り並べ、満艦飾旗を靡かせて伊勢の湊を出港した。

困難が予想される蝦夷地征服へ向かうにあたってヤマトタケルは、伊勢神宮を訪ね、神

とする時、后オトタチバナヒメの犠牲入水によって、荒れ狂う海神は鎮まり、ヤマトタケルは吾妻（東国）の平定に成功する。

その軍船はどんな船だったのだろうか。

1600年以上を経て平成12年、松阪市宝塚古墳から5世紀前半のすばらしい「船形埴輪」が出土した。長さ140センチ、これまで日本最大の船形埴輪であり、推定すると全長10メートル、幅1.2メートル、優に20人乗りの堂々たる大船であった。数百年のスギ材から造った丸木船の両舷上部に、棚板を接続させて、船体を広げた準構造造船と呼ばれる船である。

この埴輪は現在、同市の新設なった「はにわ館」に他の出土品とともに常時展示されている。宝塚古墳に葬祀されたのは船の主であった土豪に相違ない。すでにこの船は海を越えて交易に活躍し莫大な富を齎していたであろう。その主は死した後も、わが船を誇り、己れの霊を天に昇らせるため、古墳の側に埴輪として埋めさせた。

時代はいつきに下るが、16世紀、伊勢の大湊は列島に誇る和船の造船場として知られるようになる。織田信長が九鬼嘉隆に命じた日本水軍の巨大軍船は多く、大湊で造船された。

伊勢は海の国であった。漁業はもちろんであるが、伊勢湾口は海の東海道三叉路にあり、航海の要衝であるとともに、一大造船場を形成していたのである。

船形埴輪



■ はにわ館

2003年3月21日、松阪市文化財センター内にオープンした「はにわ館」では、日本最大の船形埴輪をはじめとする宝塚古墳から出土した埋蔵文化財を常時、観覧することができます。

松阪市外五曲町1番地
TEL 0598(26)7330



に仕える姨・倭姫命から魔力を秘める草薙剣を授けられた。

古事記（8世紀に成立）が述べているわけではないが、大湊を出港した船は伊勢湾を横切つて一度、尾張に寄つたあと、駿河湾の焼津付近まで海上を航海したのであろう。そこで土地の反抗勢力を制圧したヤマトタケルは次に相模国へ、さらに東京湾を横切ろうとして海神の怒りをかい、暴風雨に遭う。まさに遭難せん